古老に聞く

箕輪一二三さんから聞いたこと

話し手
箕輪一二三（みのわ かずさだ）
大正十二年生まれ（故人）

聞き手
神野善治（武蔵野美術大学教授）

調査時期：平成十五年春
同十六年春・同二十一年冬

三重県五十鈴川に由来するわさび

大沢には「大沢七谷」といって七つの沢の湧水があります。このあたりは合洲（あいす）といいますが、崖線から湧き出す水だけで山葵を栽培しています。私はこの家の五代目で、父親は源清（げんせい）といって明治二三年生まれです。

父親からこんな話を聞いています。初代は三つの名前を持っており、本名は小林宮吉といって、伊勢の国の多気郡斎宮村字城堀（じょうぼり）というところの生まれで、またの名を政教（まさたか）といいました。小林家は代々、小林七兵衛を名乗って大工をしていました。宮吉はその次男で文政のころの生まれです。十七歳のときに、志を抱いて江戸に剣術修行に出て、麹町で町道場を開いていた叔父の小林清蔵のもとで剣術を学びました。宮吉は腕がよく、生島家の御用人に取り立てられました。ちょうどその生島家に行儀見習いに来ていたフデ（ふで子）という娘と親しくなった。たぶんお互い見初めたのでしょうね。そのフデが武蔵国大沢村の名主箕輪半兵衛の娘だったんです。うちの養子になってここへ居つく気があったら、ちょうど潰れ屋敷があるので、そこで分家を起こさないか、土地と田んぼも与えようと持ちかけました。そして宮吉は婿に入る話が決まり、政右衛門と改名して分家の初代になったんです。

政右衛門は、この土地に湧水が多いことに気付いた、それで故郷の伊勢の五十鈴川の沢を思い出して、「あぁここで山葵を作るといい」と思いついたんです。五十鈴川では魚を釣って、沢の山葵を石にすりつけて食べていたらしい。江戸には魚河岸があって武士の間では刺身を食べるのが流行っていた。そういう高級な料理が食べられたのは江戸だったからですよね。そのころ山葵なんかは伊豆や駿河から取り寄せていたらしい。

築地に出したわさび店

伊豆などの山間部に比べて大沢は気温が高く、夏になると水温が二十度以上になってしまいます。伊豆などでは三年くらい栽培したものを出荷しますが、ここ（大沢）では夏を超える前に毎年一年ものを出荷します。そのかわり水温が高い分成長が早い。伊豆などでは大雨になるとわさび田が流されるので、そんなときここのわさびは高く売れました。

父源清は七人兄弟で、四番目に女がいたので七福神だといっていました。弟たちのうち次男・三男がわさびの生産者で、下の弟たち三人が築地で商売をした。神田須田町に店を持ち（すぐに京橋に越す）そのころの半纏が残っています。胸に「神田　箕輪山葵店」とある。昭和九年には従兄弟が手伝いに来てくれて須田町の店に山葵を運んでくれました。

わさび田を開墾する

水量に応じて開墾しました。山を切り崩し、水源から田まで測量してどれだけの勾配をつけるのかを決めます。わさびは水を貯めたら腐ってしまうので六尺に一寸（約百八十cmに三cm）の勾配をつけてやります。わさびが根をはるのは砂のところ、山を切り崩した土砂は土が混じっていますが、きれいに洗えば泥は流れ砂が沈殿して分かれてくれます。砂がたまりすぎると、砂利を崩して水で洗う。大きい石が上に残り、砂が沈殿します。石も選別して、水の多いところには大きい石を、少ないところへは細かいのを入れます。三男の義一も、四男の太左衛門もそれぞれわさび田を開墾しました。埼玉の片山にもわさび田を作り、筆吉、太左衛門があちこち開墾しました。府中の車返しにもわさび田がありました。また父の弟の一人はツマモノ（刺身のつまの大根）屋を魚市場の場外に作って成功しました。大根をカンナで千六本に削り、生姜や人参とかを仕入れて、わさびと一緒に魚屋や料理屋に卸す商売で儲けました。隣家の箕輪家では、わさび漬けを作って商売をしておりました。

神野善治氏調査報告（未発表）を要約

箕輪一二三さん（故人）
（平成21年撮影）

わさび栽培とむかしの暮らしを伝える、大沢の里古民家（仮称）を公開します。

一般公開 平成三十年秋

大沢の里古民家（仮称）は、明治三五年に創建された、四間取りの典型的な農家です。わさび栽培や養蚕などの生業に伴い、何度かの改築を経て、昭和五五年頃まで民家として使われていました。平成二九年から始まった整備工事では、建物を入念な調査のうえ一旦解体し、間取りの変遷を踏まえた昭和二五～五五年頃の姿に四間取りの典型的な民家として復原整備します。

チームわさびが 古民家を 見る×書く

ー大沢の里古民家（仮称）復原を取材中ー

team wasabi since 2017 mitaka

市民レポーター「チームわさび」

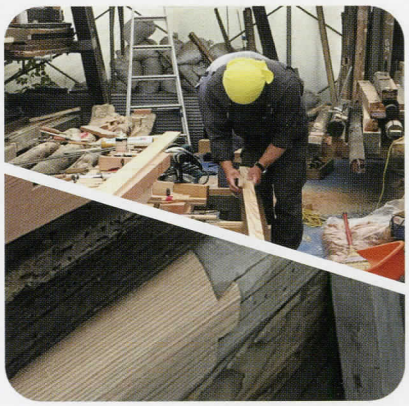
この古民家は三鷹市の有形文化財に指定され、現在復原工事が進められています。それを市民レポーターが、毎月取材をしています。平成29年に（公財）三鷹市スポーツと文化財団が主催した「エコミュージアム・レポーター養成講座」を受講した中の有志５名です。この古民家がわさび農家であったことからこのチーム名になりました。基礎工事の段階から取材しているため、完成後は目にすることのできない床下や土壁の下地、銅板の下に隠れてしまう茅葺屋根などの貴重な一瞬も記録することができました。そして、職人さん達のこだわりにも驚くことが多くありました。みなさんに、私たちのワクワク感が伝わるようなレポートを残したいと思っています。

補修

この復原工事では、元の部材を再使用するために、さまざまな職人技が駆使されています。例えば柱は、根元の腐った部分だけ切り取って、新しい材木を継ぎ足して補修します。しかし、スパッと切って接着するような単純なものではありません。「根継ぎ」といって複雑な継ぎ手加工を施して接合してあります。

古材と新材の接合部では新材が約三ミリメートル大きく作られています。これは将来収縮することを計算しているそうです。また、当然色が異なるので「古色仕上げ」という塗装を施して古材の色に合わせてあります。皆さんが見学されるときには、ぜひ注目していただきたいポイントです。

傷みが酷くて新しい材木で作り直した部材や、強度を高めるために追加された部材には「平成二十九年度補修」の焼き印が押されています。こうして補修の実態を、遠い将来再び解体調査する人達に伝えています。（生田清敏）



根葺

今回の屋根の補修では茅葺屋根の上を銅板で覆うのですが、なぜなのでしょうか？。これは現在の建築基準法により市街地等防火が必要な指定地域では、新しく建物を建てる時には不燃材を使うことが義務付けられているためです。

屋根のおすすめの見どころを三つ紹介します。

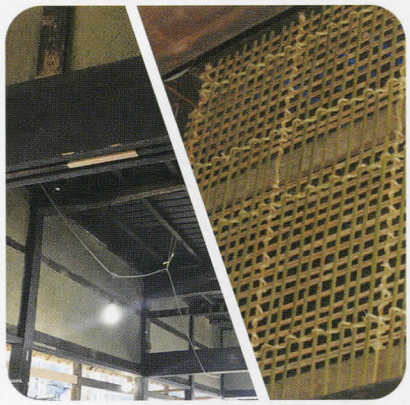
①「下からのぞくと見える茅葺屋根」東北から職人さんを呼び、丁寧に手作業で造った茅葺屋根を軒下から見上げることができます。

②「急な角度の扠首（さす）構造」茅葺屋根の一般的な骨組みで、重い屋根を支えるのに適した構造です。傾斜の強いとても大きな屋根と広い屋根裏部屋が特徴です。

③「銅板葺きの色変化」ピカピカの銅は、やがて緑青（ろくしょう）色に変化していきます。緑青とは鎌倉の大仏様やアメリカの自由の女神の色です。自然にあの色になるのは驚きです。職人さん達の技で完成した屋根をゆっくりご覧ください。（石原美子）

土壁

土壁の下地を小舞（こまい）と言い、竹を格子状に編んで作られています。見えなくなってしまう部分ではありますが、なかなか美しい手仕事で、土壁が塗られてしまうのが惜しい程です。この古民家では、壁の職人さんが一週間位かけて土壁を塗りました。現場に残されていた板に壁土の材料が書かれていました。荒木田　四杯、古土　一杯、小原砂　一杯、藁バケツ四杯です。荒木田とは東京都荒川沿いの荒木田原産の粘着力の強い土、もしくは同種の土のことです。古土とは、古民家の土壁をはがして再利用したものです。小原砂（おばらずな）は愛知県小原産の砂です。土壁に混ぜる藁などを、すさ（つた）と言います。すさには、土壁のひび割れを防ぐつなぎの役割があります。土壁は最近ではあまり見られなくなりましたが、自然素材のため、シックハウス等とは無縁で、湿度や温度を一定に保ってくれる性質があります。（田口美穂子）



基礎

古民家は、砂利の上に礎石という石が置かれ、その上に土台と柱が載っていたようです。今回の修復ではその建築方法が再現されています。とはいっても現在の建築基準法にも合わせて基礎の部分は鉄筋コンクリートで新設してあります。

この古民家は築百十余年経っていて、元の土台は傷んだところも多かったようです。そこで、旧部材に似た材木をうまく組み合わせて使っています。新しい部材は機械で大まかに削られ、微妙な曲線は「ちょうな」という道具を使い手で削り出されていました。手削りの美しい跡があちこちに見られました。また、礎石の丸みに合わせて土台を削る「光付け」という技が使われています。

残念ながら、このような土台の仕事は、壁ができてしまうと外からはほとんど見ることができません。そんなところにも手を抜かない宮大工の方々の丁寧な仕事ぶりが印象的でした。（田口玲子）

Mitaka Eco Museum Excursion

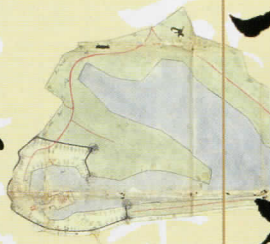
三鷹エコミュージアム研究

みいむ

創刊準備号
2018,March

特集　井の頭恩賜公園 100 周年

井之頭百景



ふかぼり 井の頭

年礼 高橋家を文書読み解く

古老に聞く 武蔵野の麦食文化

北野の昔と今 変わりゆく街並み

みたかの暮らしの唄

創刊準備号って？

『みぃむ』創刊準備号をお届けします。「創刊準備号」は、これまでに三鷹で行われているエコミュージアムの活動を紹介し、平成三十年度に刊行を目指している「創刊号」のコンセプトと内容を理解していただくために発行します。次回創刊号は、市民参加による編集委員会を組織する予定です。

三鷹型エコミュージアムに期待すること

まるごと博物館宣言！

チームわさびが大沢の里古民家を 見る×書く